

[会長講演]

認知語用論からみた文法・論理・レトリック

山 梨 正 明

京都大学

The main objective of this paper is to integrate the compartmentalized studies of grammar, logic, and rhetoric within a new framework of pragmatics—*cognitive pragmatics*—which investigates the underlying mechanism of linguistic and non-linguistic phenomena in terms of our general cognitive capacity based on the embodied experience of our dynamic interaction with the world. An attempt will be made to provide a unified account of a variety of phenomena related to grammar, logic, and rhetoric involved in natural language, with a special focus on the cognitive pragmatic analysis of inferential anaphora, constructional blending, syllogistic inference, conventional and non-conventional metonymy, mixed metaphor, transferred epithet, and on-line phenomena of speech errors.

キーワード： 認知語用論、認知能力、運用能力、論理、レトリック、オンライン文法

1. はじめに

「認知語用論」(*cognitive pragmatics*)という用語は、言語学の分野の専門用語としては厳密には使われていない。本稿では、認知言語学のパラダイムを背景とする語用論の研究を、「認知語用論」の研究として位置づける。認知言語学は、人間の認知能力にかかわるさまざまな要因を言語現象の記述・説明の基盤とするアプローチをとる。認知言語学の研究は、文法を中心とする従来の研究で扱われてきた言語現象を根本的に問い直すだけでなく、これまで等閑視されてきた語用論にかかわる現象にも目を向け、研究のスコープを広げつつある。認知言語学のアプローチの基本的な特徴は、認知能力を反映する主体の経験的な基盤に基づき、言語現象をダイナミックに探究している点にある。この認知能力の観点から、言葉の使用と解釈の諸相をダイナミックに研究していく新しい語用論の研究を、「認知語用論」の研究として定義する(山梨 2001: 179)。¹ 本稿では、認知言語学の視点を

¹ 山梨(2001)では、「認知語用論」を、以下のように定義している：

「認知能力の観点から、言葉の使用と解釈の諸相をダイナミックに研究していく新しい語用論

背景にした新しい「認知語用論」の観点から、文法・論理・レトリックにかかわる言語現象を分析し、これまでの言語学における文法論と意味論の研究領域を越える言語学の新たな研究の方向を探っていく。²

2. 認知語用論の研究の方向性

西洋の伝統的な学問においては、文法学・論理学・レトリックは、古典的な学問の中核である三学科 (trivium) を構成する独立した部門として位置づけられる。この伝統的な区分に従うならば、文法の部門だけが言語学の研究のターゲットであり、論理学とレトリックの部門は、言語学の関連部門として等閑視されることになる。しかし、日常言語には、文法・論理・レトリックのどの側面も密接にかかわっている (図1、図2)。

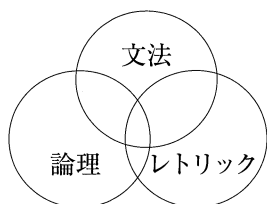
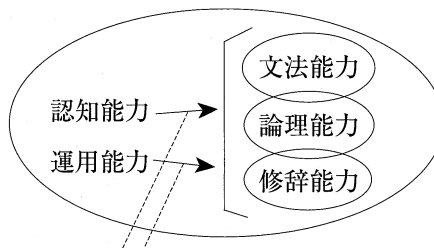


図1



(創発的／創造的な発現プロセス)

図2

生成文法に代表される形式文法のアプローチでは、文法能力は、人間の一般的な認知能力や運用能力からは独立した自律的な能力であるという前提のもとに言語分析を試みる。また、論理学やレトリックの分野においては、一般的に論理能力は文法能力からは独立した理性的思考、修辭的な能力は文法能力を越える言葉の綾 (ないしは思考の綾) にかかわ

の研究を、ここでは「認知語用論」(cognitive pragmatics)の研究として位置づけることにする。」(ibid.: 179)。

新しい言語学の研究プログラムを志向する「認知語用論」の具体的な研究に関しては、山梨 (2000a: 113-116)、山梨 (2004: 第3章)、山梨 (2001)、林 (2002、2006)、岡本 (2006) を参照。

² 言語学の分野で一般的に使用されてきている「語用論」という用語は、Morris (1938: 29-30) の「プラグマティックス」(pragmatics) という用語に由来しているが、日本語の「語用論」という用語には語弊がある。この用語は、「語用」という表現から明らかなように、文字通りに解するならば話し手 (ないしは書き手) の視点を反映しており、聞き手 (ないしは読み手) の視点はこの語には反映されていない。しかし、この用語が英語の pragmatics に対応する用語として用いられる場合には、話し手／書き手の視点と聞き手／読み手の双方の視点を反映する用語として理解する必要がある (山梨 2000b: 1)。

本稿で使用する「認知語用論」という用語における「語用論」は、厳密な意味では、話し手／書き手の視点と聞き手／読み手の双方の視点を反映する用語として規定する点に注意されたい。

る能力として位置づけられる。

これに対し、以下の考察では、認知語用論の視点（認知能力を反映する主体の経験的な基盤を背景とする語用論の視点）から、日常言語の文法現象と論理とレトリックにかかわる言語現象を考察していく（cf. 図2）。3節では、文法現象の中核にかかわる統語現象として位置づけられる照応現象と構文現象の一面を、言葉の背後に存在する言語主体の認知能力（特に、参照点能力にかかわる認知能力）の観点から分析し、これまで自律的な文法能力の反映とみなされていた統語現象を、一般的な認知能力の制約に基づいて分析していく。4節では、日常言語の推論現象の一面を認知言語学の枠組みに基づいて分析し、人間の思考の中心をなすと考えられている論理能力の一面を、イメージ形成、焦点化、脱・焦点化、スーパー・インボジション、イメージスキーマ変換、等にかかわる認知能力の観点から再規定していく。5節では、認知言語学的な視点から修辭的な現象の一面を考察することにより、日常言語の文法を越える言葉の綾（ないしは思考の綾）の能力とされている修辭能力を、言葉の背後に存在する言語主体の認知能力（特に、メトニミー変換、メタファー変換、等にかかわる認知能力）から見直していく。6節では、時間軸にそった文ないしはテキストの展開のオンライン・プロセスの観点から、日常言語の文法現象の再規定を試みる。これまでの言語運用の側面を無視した自律的な言語的知識を前提とする文法研究では、言葉の文法的な側面や意味的な側面の記述・説明に際し、時間軸にそった文ないしはテキストの展開のオンラインの認知プロセスにかかわる要因は無視されている。6節では、時間軸にそった文ないしはテキストの展開のオンライン・プロセスを考慮しない限り、自然な予測が不可能な言語現象を考察していく。7節では、日常言語の自然発話にみられる言い直し、言い誤り、繰り返し、等の破格的な言語現象を考察していく。一見したところ、言い直し、言い誤り、等の言語表現の発現は、非合理的な言語運用にかかわる制約に起因するようにみえる。しかし、この種の表現の中には、時間軸にそって発話を構築していく言語主体の主観的な認知プロセスが反映されている。7節では、認知言語学的な視点から、意味の反転、焦点シフト、ブレンディング、スワッピング、等の認知プロセスに起因する言い直し、言い誤り、等のパロール的な側面にかかわる言語現象を考察し、これまでの形式文法の研究が前提とする言語能力と言語運用のカテゴリカルな区分を越える認知語用論の新たな研究の方向を探っていく。

一般に、語用論の問題を考えていく場合、分析の典型的なターゲットは、発話例や談話・テキストにかかわるマクロ的な言語事例が中心となり、これらの言語事例を構成する語彙レベル、句レベル、文レベルのミクロ的な言語事例の分析は等閑視される傾向にある。このような傾向は、伝統的に、言語学の研究のターゲットを音韻・形態論、語彙論、文法論、意味論というようにモジュール的な下位部門として分類し、語用論の部門をこれらの下位部門からカテゴリカルに区分することに起因する。この種の区分に従うならば、語彙レベル、句レベル、文レベルにかかわる言語現象は、音韻・形態論から文法論にかか

わる現象（ないしはこれらの形式と意味の記号的な関係を分析する意味論にかかわる現象）として、いわゆる語用論の部門にかかわる現象とは区別することになる。しかし、本稿の認知語用論のアプローチは、このような言語研究のモジュール的な下位区分は認めない。本稿では、むしろ広い意味での語用論の視点から、音韻・形態論、語彙論、文法論、意味論にかかわる現象も包括的に見直していく立場をとる。換言するならば、本稿では、マクロ的な談話・テクストレベルの現象だけでなく、ミクロ的な言語事例を構成する音韻・形態、語彙、文、等の言語現象も、具体的な伝達の場において言語を使用する（あるいは理解する）認知主体の語用論的な制約を反映する言語現象として見直していく立場をとる。本稿の以下の考察では、発話や談話・テキストにかかわる具体例だけでなく、語彙、語句、文、等のミクロレベルにかかわる言語現象も、語用論の視点（特に、人間の認知能力と運用能力を記述・説明の背景的な基盤とする）認知語用論の視点から考察していく。

3. 認知能力からみた文法現象の一面

これまでの言語学の研究（特に生成文法をはじめとする形式文法の研究）では、日常言語の中核をなす文法は形式的で自律的な記号系であり、文法現象は、記号の形式的な関係からなる統語的な制約によって規定されるという前提に立っている。しかし、日常言語には、この種の統語論の自律性を前提とするアプローチからは予測できない文法現象が広範に存在する。日常言語を特徴づける文法現象の中には、外部世界を解釈し意味づけしていく言語主体の認知能力にかかわる制約を考慮しないかぎり、自然な予測・説明が不可能な現象が観察される。本節では、この種の現象の一例として、文法現象の中核をなす照応、省略、統語的融合、等にかかわる事例を考察する。この種の言語現象は、一見したところ、静的な文法知識（ないしは言語処理のオンラインの認知プロセスを捨象した自律的な文法知識）を前提とする文法研究によっても分析が可能にみえる。しかし、以下で考察する言語現象は、時間軸にそった文ないしはテキストの展開のオンラインのダイナミックな認知プロセスを考慮しないかぎり、問題の言語表現の適否に関する自然な予測は不可能な現象である。本節の以下の考察は、静的な文法知識（ないしは自律的な文法知識）を前提とする言語研究を、オンラインの言語処理の認知的要因（ないしは言語運用的な要因）から根本的に問い直していくための一つの検証の場を提供する。

3.1. 照応現象の一面

日常言語のなかには、伝えようとする意味のすべてを言葉にするのではなく、その一部にフォーカスを当てて表現し、意図する意味を文脈によって補完していくメトニミー表現が広範にみられる（e.g. 「鍋が煮えている」、「ドンブリをたいらげる」、「一升瓶を飲み干

す)。この種の表現のかなりの部分は慣用化している。

この種のメトニミー表現は、照応現象に密接にかかわっている。照応の問題として特に興味深いのは、メトニミー表現の意味する対象が、後続の照応表現の先行詞として機能する場合である。例えば、(1)-(3)のメトニミー表現(e.g.「鍋」、「ドンブリ」、「一升瓶」)は、〈容器-中身〉の空間の近接関係を通して、照応詞の「それ」(ないしは、ゼロ照応詞の「Φ」)と同一指示の関係にある(山梨 1992: 98-99)。³

- (1) a. 鍋_iを食いかけたが、うまくないので{それ_iを／Φ_i}猫にあげてしまった。
b. 〈それ／Φ = 鍋の中身／食物〉
- (2) a. ドンブリ_iがでてきたので、すぐに{それ_iを／Φ_i}食べた。
b. 〈{それ／Φ} = ドンブリの中身／食べ物〉
- (3) a. 一升瓶_iを飲みかけて、途中で{それ_iを／Φ_i}こぼしてしまった。
b. 〈{それ／Φ} = 一升瓶の中の酒〉

(1)-(3)の明示的な照応詞とゼロ照応を比べた場合、厳密にはゼロ照応の方がより自然である。この種の照応の判断はかなり微妙であり、適切性の判断は問題のメトニミー表現の慣用性にも左右されるが、メトニミー表現としての「鍋」、「ドンブリ」、「一升瓶」の類は、これらの表現自体が食べ物(ないしは飲み物)を表現する名詞として慣用化している。したがって、以上の照応関係の理解は不自然ではない。

この種のメトニミーがかかわる照応現象は、言語主体の認知能力の中核をなす参照点能力(reference-point ability)の観点から規定することが可能である。(1)-(3)の例では、「鍋」(ないしは「ドンブリ」、「一升瓶」)が参照点(R=reference-point)となり、これを起点としてターゲット(T=target)としての〈食べ物〉(ないしは〈酒〉)へのアクセスが可能となる。参照点構造の認知プロセスの規定に従うならば、この種のメトニミー表現の意味のアクセスのプロセスは、次のように規定することが可能となる。(以下では、「鍋」と「一升瓶」のメトニミー表現の参照点構造だけを示す。)

³ 以下の例では、サブスクリプト(i.e., i)でマークされる先行詞と照応詞は、基本的に同一指示の関係にあることを示す。ただし、以下の考察から明らかなように、この種の同一指示性は、参照点能力にかかわるメトニミー的な認知プロセスを介しての同一指示性である点に注意する必要がある。

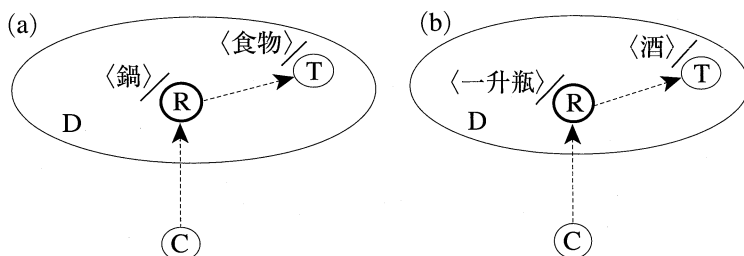


図3

ここでは、「鍋」(ないしは「一升瓶」)それ自体は、これに後続する照応詞(「それ」)ないしはゼロ照応詞(「(Φ)」)と直接的には同一指示の関係にはない点に注意する必要がある。別の観点からみるならば、この種のメトニミー表現の表層レベルには、後続の照応詞に直接的に呼応する先行詞は存在していない。しかし、図3の(a)、(b)の規定から明らかのように、上記の例では、「鍋」(ないしは「一升瓶」)が参照点となり、これを起点としてターゲットとしての〈食べ物〉(ないしは〈酒〉)の意味へのアクセスが可能となり、このターゲットが、後続の照応詞の先行詞として同定可能である。参照点とターゲットのダイナミックな認知プロセスに基づく以上の照応現象の先行詞(=ant)と代名詞(=pro)の同一指示の理解のプロセスは、図4に示される。

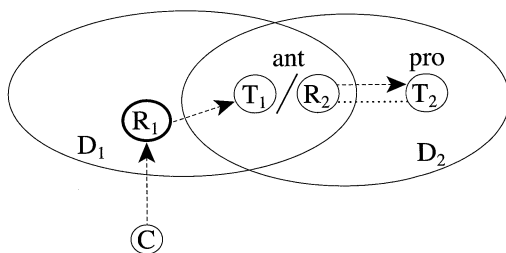


図4

図4の R_1 は、参照点としての「鍋」(ないしは「一升瓶」)、 T_1 はこの参照点を介して認定されるターゲット(〈食べ物〉、〈酒〉)、 T_2 はこのターゲットを次の参照点(R_2)として認定される代名詞(「それ」、「(Φ)」)に対応する。 R_2 と T_2 を結ぶ点線の矢印は、先行詞の $R_2 (= T_1)$ と代名詞の T_2 の同一指示性(すなわち、両者が照応的に呼応していること)を示すものとする。

文法能力の自律性を前提とするこれまでの形式文法の研究では、照応現象は、先行詞と照応詞の統語関係にかかわる文法的な制約から予測可能であるという前提で分析がなされている。しかし、以上の照応現象の考察から明らかのように、日常言語には、文法的な統語上の制約ではなく、言語主体の認知能力の中核をなす参照点能力の制約を考慮しなければ、先行詞と照応詞の呼応関係が予測できない例が広範に存在する。本節で指摘したメト

ニミーがかかわる照応現象は、この種の現象の中核をなす言語現象として注目される。

文の展開のオンライン的な認知プロセスがかかわる事例としては、さらに先行詞と代名詞の照応関係の理解に関する次のような例が挙げられる。

- (4) a. おいしそうなドンブリ_iを受け取った瞬間に (Φ_i) 割ってしまった。
 b. $\langle(\Phi) = \text{ドンブリの容器 (を)}\rangle$
- (5) a. 一升瓶_iを飲みかけていて、(Φ_i) ヒビが入っているのに気がついた。
 b. $\langle(\Phi) = \text{一升瓶の容器 (に)}\rangle$

(4) の例の「ドンブリ」は、文頭の修飾語（「おいしそうな」）をオンライン的に理解している文脈では「ドンブリの中身／食べ物」を意味しているが、ゼロ照応詞（ (Φ) ）を含む後続文脈（「(Φ_i) 割ってしまった」）では、「ドンブリの容器」の意味に変化している。同様に、(5) の例の「一升瓶」は、文頭のオンライン的文脈では（慣習的に）「一升瓶の中の酒」を意味しているが、ゼロ照応詞（ (Φ) ）を含む後続文脈（「(Φ_i) ヒビが入っている…」）では、「一升瓶の容器」の意味に変化している。この種の事例は、先行詞と照応詞の呼応関係が、常に先行詞の参照点 (R) ないしはターゲット (T) のどちらかの意味に固定されているのではなく、時間軸にそった文のダイナミックな展開のプロセスにおいて変容していくことを示している。以上の時間軸にそった先行詞の意味の変容のオンライン・プロセスは、図5に示される。

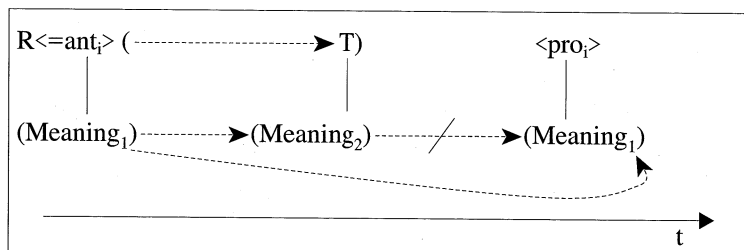


図5

図5の先行詞のR ($\leq \text{ant}_i$) の意味 (Meaning_1) は、この先行詞を含む文の途中の段階までは、「容器 → 中身」のメトニミーの認知プロセスを介して、T (Meaning_2) を意味する。しかし、この先行詞と呼応するゼロ照応詞 (pro_i) を解釈する時点では、先行詞の参照点 (R) の意味 (Meaning_1) に変容している。

以上、本節で考察した (1)–(3) と (4)、(5) の照応現象に関する事実、先行詞と照応詞の意味は、オンライン・プロセスの言語処理を捨象した語彙レベルないしは文構造のレベルで固定しているのではなく、言語理解にかかわる情報プロセスの展開においてダイナミックに変容することを示している。この種の言語現象の適切な記述・説明に関しては、文法現象に関するオンライン文法 (On-line Grammar) の観点からの見直しが必要となる

(山梨 2009: 7 章)。時間軸にそった文とテキストのダイナミックな展開のオンライン・プロセスにかかわる言語現象に関しては、さらに 6 節以降で考察していく。

3.2. 構文現象の一面

照応現象は、日常言語における文法現象の中核をなす言語現象の一種であるが、この種の現象は、(前節の考察から明らかなように) 時間軸にそった文のダイナミックな展開の認知プロセスを考慮しないかぎり、その統語関係や意味関係を自然に理解していくことは不可能である。時間軸にそった文のダイナミックな展開の認知プロセスは、以下の構文の融合にかかわる文法現象にも密接にかかわっている。(以下の考察における例文のイタリックの部分は、全て筆者による。)

- (6) a. *There is a man at the door* wants to see you.
 b. *Here is a little book* will tell you how to raise roses.
 c. *I knew an Irish lady* was married at fourteen. (Curme 1931a: 236)
- (7) a. It isn't *every boy* gets an open chance like that.
 b. *There is a man below* wants to speak to you.
 c. *It wasn't I* let him in. (Jespersen 1933: 361)
- (8) Allan: I'll never forget how impressed I was with, of all the Orientals, *the Japanese* are so bright. My God. ...
 John: ... They work at ..., and the Chinese work at it.
 (<UCSB コーパス>: 1156-73)

(6)、(7) のタイプの構文は、部分的にオーバーラップする複数の事態を叙述している文であるという点に特徴がある。例えば、(6) の a の文の前半は、*there is a man at the door* という事態を叙述している導入文であり、後半は、この導入文の事態を背景として、前半の *a man at the door* という主体がかかわる事態 (i.e., *a man at the door wants to see you*) を叙述する展開文である。この例を、文頭から時間軸にそってスキャンしていった場合、前半部と後半部の文は、*a man at the door* という名詞句の表現をピボットとして叙述の焦点シフトが起きている。基本的に同様の点は、(6) の b、c と (7) の事例にもあてはまる。すなわち、(6) の b、c と (7) の a-c では、それぞれ *a little book*、*an Irish lady*、*every boy*、*a man below*、*I* をピボットとして、文の前半の導入部から後半部に展開していく際に、叙述の焦点シフトが起きている。同様の点は、(8) の会話例にもあてはまる。この会話では、Allan の最初の発話文の *the Japanese* をピボットとして、文の前半の導入部から後半部に展開していく際に、叙述の焦点シフトが起きている。

この種の構文は、基本的に図 6 に示される融合構文の一種として規定することが可能となる。

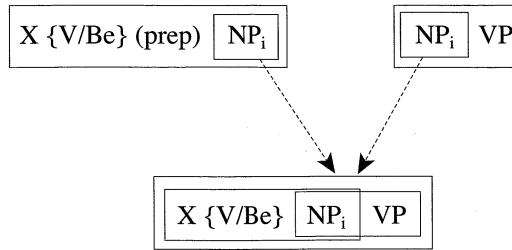


図 6

この図のうち、左上のボックスは、導入文としての前半の文を、また右上のボックスは、この導入文を背景として展開される後続文を示している。(左上のボックス内の X は、導入文の主部を示すものとする。) 中央の下ボックスは、以上の導入文と展開文が NP_i をピボットとして融合した構文を示している。

(6)-(8) のタイプの例では、共通の名詞句 (NP_i) をピボットとして、文の前半の導入部から後半部に展開していく際に、叙述の焦点シフトが起きている。この種の焦点シフトの認知プロセスは、図 7 に示される。(図 7 の図の認知的な位置づけの詳細は、山梨 (2009: 2 章 2.4 節) を参照。)

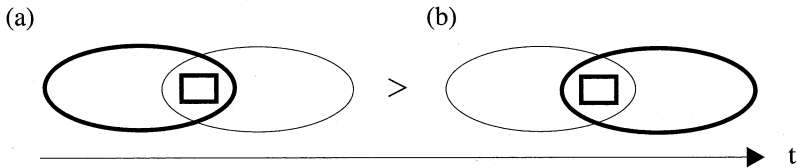


図 7

図 7 の (a) と (b) を構成する左右の楕円は、それぞれ前半の導入文と後半の展開文を示し、左右の楕円がオーバーラップする部分のボックスは、導入文と展開文の共有部分を示している。また、太線でマークされている楕円とボックスは焦点化されている部分、細線の楕円は背景化されている部分、t によってマークされている矢印は時間軸を示している。図 7 の (a) は前半の導入文の事態の焦点化、(b) は後半の展開文の事態の焦点化を示している。図 7 は、(6)-(8) のタイプの融合構文の言語理解のプロセスには、(a) から (b) への焦点シフトに基づく図と地のゲシュタルト変換がかかわっていることを示している。⁴

⁴ 焦点シフトの認知プロセスは、オンラインの文理解における主要部 (ないしは主部) の意味の変容にも関係している。次の例をみてみよう。

- (i) この 700 グラムの [百科事典] はとても面白い。
 - a. [この 700 グラムの [百科事典]] ([百科事典]=〈物理的な存在としての百科事典〉)
 - b. [[百科事典] はとても面白い] ([百科事典]=〈百科事典の情報内容〉)

3.3. ブレンディングと誤用的拡張の一面

前節の融合構文の発現は、第1文と第2文の共通の名詞句をピボットとする叙述の焦点シフトの認知プロセスに基づいている。もう一つの注目すべき融合構文の発現のメカニズムは、ある語の前半部分ともう一つの語の後半部分を融合させて新語を形成する混成 (blending) のメカニズムと共通している。一般に、後者のメカニズムによって形成される新語は、混成語 (blends) ないしはカバン語 (portmanteau words) とも呼ばれている (e.g. brunch [←breakfast + lunch], heliport [←helicopter + airport], Oxbridge [←Oxford + Cambridge]), smog [←smoke + fog])。

この種の混成表現の形成にかかわる融合は、単語レベルにおける融合であるが、これと基本的に同様の融合が、次のタイプの構文の発現 (図8) の過程にもみられる (山梨 2000: 207-208)。

- (9) a. Why don't you be quiet?
b. Why don't you be more reasonable?

この種のブレンディングの認知プロセスに基づく構文の拡張の一面は、図8に示される。

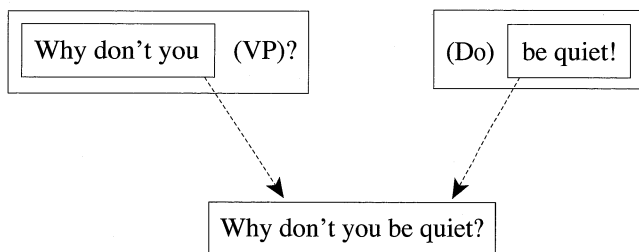


図8

(9) のタイプの構文は、一方においては疑問の発話の力が感じられるが、他方においては命令、依頼 (ないしは忠告) の類の発話の力が感じられるスピーチアクト・イディオムとして機能している。しかし、このタイプの構文は、典型的な wh- 疑問文の構文から予測できるわけではなく、また典型的な命令文の構文から予測できるわけでもない。このタイ

- (ii) 最後まで飲み干そうとしていた [一升瓶] が割れてしまった。

a. [最後まで飲み干そうとしていた [一升瓶]] ([一升瓶]=〈一升瓶の中のお酒／液体〉)

b. [[一升瓶] が割れてしまった] ([一升瓶]=〈容器としての一升瓶〉)

(i) の例の [百科事典] は、文の前半の連体修飾との関係では (a に示されるように) 〈物理的な存在としての百科事典〉を意味するが、文の後半の述部との関係では (b に示されるように) 〈百科事典の情報内容〉に意味がシフトしている。文理解における同様の意味のシフトは、(ii) の例における a から b への [一升瓶] の意味のシフトにも見られる。この種のオンラインの文理解における意味解釈の変化は、焦点シフトの認知プロセスに起因している。

プの構文は、図8に示されるように、二つの異なる構文のネットワークのブレンディング的な相互作用（より厳密には、Why don't you VP? の構文スキーマと be 動詞をとまなう命令文の典型事例とのブレンディング的な相互作用）を介して発現してくる拡張構文の一種として規定される。⁵

この種の構文のブレンディングは、日常言語の運用における誤用的拡張にかかわる文法現象にも観察される。その典型例としては、(10)-(12) が挙げられる。((10)-(12) の a は融合構文、b は融合の背景となる二つの構文を示す。)

- (10) a. Be damned to you!
 b. [Be damned! + Woe to you!] (Curme 1931b: 398)
- (11) a. Why did you do that for?
 b. [Why did you do that? + What did you do that for?]
- (12) a. The child seems sleeping.
 b. [The child seems to be asleep. + The child is sleeping.]

この種の誤用的拡張にかかわる構文の融合関係は、基本的に図9のように規定される。

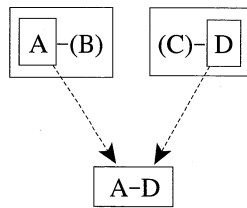


図9

図9の上段の構文 (A-(B)、(C)-D) は、融合構文の発現の背景となる二つの構文に相当する。これらの構文の (B) と (C) の部分は、両者の構文の融合の際に背景化される部分を示している。図9は、この図の下段の融合構文 (A-D) が、(B) と (C) の部分の背景化を介して発現するプロセスを示している。この種の融合のプロセスを介して発現する(10)-(12) のタイプの構文は、規範的な英語の用法としては認められていない。したがって、この種の構文は、厳密には誤用的な拡張構文の一種とみなされるが、日常言語の実際の運用においては理解可能な構文の一種と言える。この種の誤用的拡張にかかわる文法現象は、「いぶかしむ」、「火蓋を切って落とす」のような日本語の表現にも観察される。これらの例のうち、前者は「いぶかる + あやしむ」という二つの表現から発現した融合的表

⁵ 山梨 (2009) は、この種の構文を規定する文法モデルとして、〈融合ネットワークモデル〉を提唱している (ibid.: 5 章 8 節)。

現、後者は「火蓋を切る＋幕を切って落とす」という二つの表現から発現した融合的表現として理解される。

以上、本節にみた言語現象は、従来の言語能力の自律性を前提とする文法研究（特に、言語能力と言語運用の二分法的な区分を前提とする生成文法の研究）では、言語運用にかかわる現象であり、いわゆる言語能力にかかわる文法プロパティの現象としては認められない。⁶ しかし、本稿の考察では、生成文法が前提とする言語能力と言語運用の二分法的な区分は認めない。⁷ いわゆる文法的な知識は、厳密には、日常言語の伝達の文脈において常にゆらいでおり、ある時点において誤用的とみなされる現象も、慣用化のプロセスを介して文法的な知識の一部として組み込まれていく可能性を秘めている。3節の冒頭で触れたように、本稿の文法観は、実際の言語使用の文脈を考慮したオンライン文法（on-line grammar）の視点から言語現象をダイナミックに分析していく立場に立脚している（山梨 2009: 7章）。本節で考察した日常言語の運用の場における誤用にかかわる言語現象に関しては、6節でさらに具体的な考察を進めていく。

4. 認知能力からみた言語の論理的側面

記号の自律的な形式操作を前提とする論理学は、真偽にかかわる推論のプロセスは、言語主体の経験的な基盤からは独立した数理的な演算体系によって形式的な規定が可能であるという前提に立っている。しかし、真偽の判断、推論、等にかかわる人間の心的行為は、根源的にはイメージスキーマ、焦点化、スーパー・インポジション、メタファー写像、等がかかわる人間の認知能力との関連で見直していくことが可能である。

我々の概念体系は、容器（Container）、起点-経路-到達点（Source-Path-Goal）、部分-全体（Part-Whole）、等のイメージスキーマによって特徴づけられている。この種の概念体系を特徴づけるイメージスキーマは、焦点化、スーパー・インポジション、等の認知プロセスを介して、日常言語の推論プロセスの発現を可能としている。⁸ その一例として、

⁶ 理想化された話し手／聞き手の立場から、言語運用の問題を排除する生成文法の言語観に関しては、次の Chomsky の主張を参照。

“Linguistic theory is concerned primarily with an ideal speaker-listener, in a completely homogeneous speech-communication, who know its (the speech community’s) language perfectly and is unaffected by such grammatically irrelevant conditions as memory limitations, distractions, shifts of attention and interest, and errors (Chomsky 1965: 3)

⁷ 生成文法が前提とする言語能力と言語運用の二分法的な区分の本質的な問題に関しては、山梨 (1991) を参照。

⁸ この種のイメージスキーマの分析に関しては、Johnson (1987: 18-40)、Lakoff (1987: 271-275)、山梨 (2000a: 139-176) を参照。

「XがAのカテゴリーに属し、AがBのカテゴリーに属するならば、XはBのカテゴリーに属す」という演繹的な推論のプロセスを考えてみよう。伝統的な形式論理学や記号論理学による規定では、この種の推論プロセスは、次のように、形式的な記号間関係に基づいて定式化される：[X is in A. A is in B. Therefore, X is in B.]。この種の論理学における形式的な規定からみるならば、演繹的な推論の世界は、外部世界に関するわれわれの経験的な基盤からは独立した、形式的な記号操作によって定式化することが可能な世界とみなされる。しかし、認知的な視点からみた場合、一見したところ純粋に形式論理の世界に属するようにみえるこの種の推論も、容器のイメージスキーマと焦点化、スーパー・インポジション、等の認知プロセスの相互作用を介して理解することが可能になる。

イメージスキーマに基づく認知的な規定では、カテゴリーは容器のスキーマを比喩的に概念化した存在である。換言するならば、カテゴリーは、抽象的な容器の一種として理解される存在である。したがって、このイメージスキーマに基づく認知プロセスからみるならば、「XがAのカテゴリーに属し、AがBのカテゴリーに属するならば、XはBのカテゴリーに属す」という抽象的な言明は、「XがAという容器の中に存在し、AがBの容器の中に存在するならば、XはBの容器の中に存在する」という、容器の空間内における存在の包摂関係の認知プロセスとして再規定することが可能となる（図10）。

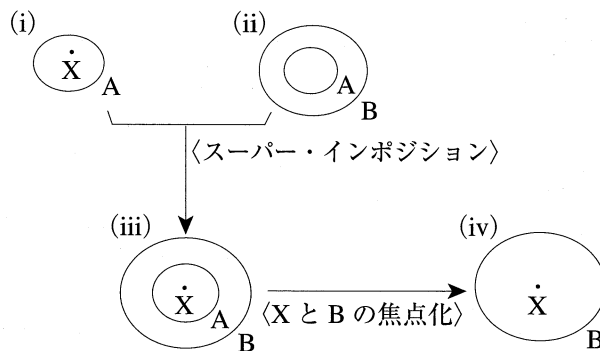


図 10

図10は、この容器のスキーマの包摂関係に基づく理解のプロセスを、スーパー・インポジション、イメージスキーマの焦点化の認知プロセスに基づいて明示している。図10の(i)はAの容器におけるXの存在、(ii)はBの容器におけるAの存在を示し、(iii)は(i)の(ii)に対するスーパー・インポジションの認知プロセスの結果を示している。さらに、(iv)は、(iii)におけるXとBの容器のイメージスキーマの焦点化の結果（別の観点からみるなら、(iii)におけるAの容器のイメージスキーマの脱・焦点化ないしは背景化の結果）を示している。

この規定に従うならば、ある存在の属性にかかわる推論も、容器のイメージスキーマと焦点化、スーパー・インポジションの認知プロセスに基づいて理解することが可能にな

る。

- (1) Mr. Smith is a politician.
 All politicians are dishonest.
 Therefore, Mr. Smith is dishonest.

例えば、(1) のような三段論法の場合、スミス氏は政治家という集合の容器に属し、政治家の集合は不正直な人間の集合の容器に属する。したがって、スミス氏は、不正直な人間の集合の容器に属することが、具体的な容器の包摂関係に基づいて理解される。

日常言語の推論にかかわる認知プロセスの基盤を構成するイメージスキーマとしては、さらに〈起点-経路-到達点〉(Source-Path-Goal) のスキーマが考えられる。この種のスキーマは、推論のプロセスを述べる次のような言語表現の文法構造に反映されている。

- (2) a. From their explanation, we conclude that the boy is innocent.
 b. I reached the conclusion that I had made a right choice.
 c. {come to/arrive at/reach} the conclusion that ...
 d. jump to a conclusion, bring ... to a conclusion
- (3) a. 以上の事実から、この結論に至った。
 b. P と Q の前提から、R の帰結に達する。
 c. P と Q の前提から、R の結論が導き出される。
 d. P と Q の前提から、R の帰結が引き出される。

(2)、(3) の from と「から」によってマークされる表現は、前提（ないしは前提となる証拠）が〈起点-経路-到達点〉のイメージスキーマの〈起点〉に対応し、また、to、at、「に」によってマークされる表現は、結論（ないしは帰結）が〈到達点〉に対応することを示している。また、reach、come、arrive、jump、bring、「至る」、「達する」、「導き出す」、「引き出す」、等の動詞は、前提（ないしは前提となる証拠）から結論への推論のプロセス自体が、〈起点〉から〈経路〉を通して〈到達点〉に至る移動に対応することを示している。

この種の事実は、基本的に、概念空間における推論のプロセスは、物理空間における移動のプロセスの比喩的マッピングの認知プロセスによって理解されることを示している。この比喩的なマッピングの関係は、図 11 に示される。

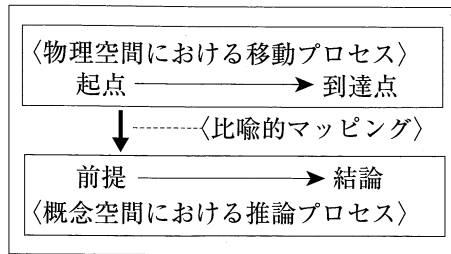


図 11

この種の比喩的マッピングは、さらに次の小説の語りの文章によっても裏づけられる(山梨 2002: 187)。

- (4) From asking at doors and being constantly rebuffed or denied, he finally came to the conclusion that she might be ... within the sound of his voice.

(Theodore Dreiser, *The Lost Phoebe*: 182)

この場合、from の目的語によって指示されている行為そのものは、論理的な意味での前提ではない。しかし、この行為の結果から含意される情報が、比喩的な〈到達点〉としての結論に至るための前提(すなわち、比喩的な〈起点〉)として理解される。

イメージスキーマにかかわる認知プロセスは、論理的な世界における命題の全称性／特称性の量化(quantification)の適否の判断に関しても重要な役割を担っている。現実の世界を考えた場合には、次のような表現は論理的な表現とは言えないが、日常言語の表現としては自然である。

- (5) a. 母さんはいつも文句ばかり言っている。
b. その生徒は一日中ずーっとくしゃみをしていた。

(5) の a の母親の文句を言う行為や b の生徒のくしゃみの行為は、間隔をおく断続的な行為である。したがって、この種の間隔をおく断続的な行為に、行為の継続を意味する「いつも」、「一日中ずーっと」のような修飾表現が共起することは不可能である。

しかし、この種の事実は、図 12 の (a) の 1 次元の間隔をおく断続的な世界から、(b) の 1 次元の連続体の世界へのイメージスキーマ変換の認知プロセスを考えるならば、自然に理解することが可能となる。

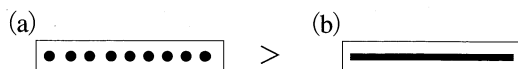


図 12

すなわち、図 12 の (a) の 1 次元の間隔をおく断続的な世界から、(b) の 1 次元の連続体

の世界へのイメージスキーマ変換により、(5)のaの文句を言う行為やbのくしゃみの行為も主観的には連続的な行為として解釈されるため、この種の行為に関する表現と「いつも」、「一日中ずーっと」のような継続的な行為を修飾する表現との共起が可能となる。

基本的に同様の点は、次の例にもあてはまる。

(6) a. ゴキブリはどこにでもいる。

b. Cockroaches are everywhere.

現実世界の場所・空間を考えた場合、ゴキブリが厳密にあらゆる場所・空間に存在するという言明は偽である。したがって、この点では、(6)のタイプの文は、論理的に適切な表現ではない。しかし、外部世界の解釈にかかわる図13のような言語主体のイメージスキーマ変換の認知プロセスを考慮するならば、(6)のタイプの表現が、日常言語の表現として自然であるという事実を理解することが可能となる。

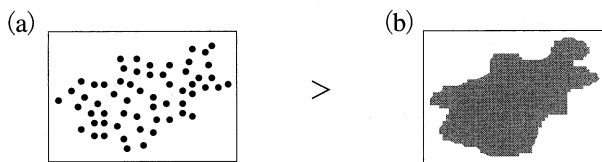


図13

図13は、(a)の個体の断続的な存在の世界から、(b)の個体の連続的な存在の世界へのイメージスキーマ変換の認知プロセスを示している。このイメージスキーマ変換の認知プロセスにより、世界の一部の場所・空間に存在するゴキブリが、全体的にいき渡って存在するように主観的に解釈されるため、「どこにでも」、everywhereのような全称命題の量化がかかわる(6)のタイプの数量表現が可能となる。

記号の自律的な形式操作を前提とする伝統的な論理学では、真偽の判断、推論、等がかかわる論理の世界は、外部世界の解釈にかかわる言語主体の認知プロセスからは独立した数理的な演算体系によって形式的な規定が可能であるという前提に立っている。これに対し、本節では、一見したところ形式的な論理の世界を自律的に構成しているようにみえる真偽の判断、推論、等のプロセスは、根源的には、イメージスキーマ形成、焦点化、スーパー・インボジション、メタファー写像、イメージスキーマ変換、等の言語主体の主観的な認知プロセスに根ざしている点を明らかにした。この事実は、一見、言語主体から独立しているようにみえる論理能力は、根源的には、言語主体の身体的経験を背景とする認知能力に根ざしていることを示している。

言語表現のなかには、文学的な視点ないしは芸術的な視点を反映する言葉の綾を考慮した特殊な言い回しが広範にみられる。日常言語の分析を中心とするこれまでの研究では、この種の表現は、文学言語（ないしは芸術的な言語）を特徴づける修辭的な特殊表現として、いわゆる日常言語の表現からは区別されている。しかし、どのような言語表現も、外部世界を解釈し意味づけしていく言語主体の認知プロセスの反映であるとする認知言語学の観点からみるならば、文学言語や芸術的な言語の修辭的表現も日常言語の表現も、言語主体の認知能力の観点から一般的に規定していくことが可能となる。まず、修辭的な言語表現の典型例として、次のような例を考えてみよう。

- 以上の例では、「舟」と“our whole town”が修辭的に特に注目される。これらの表現は、通常は有生物を主語にとる動詞と共に起している。したがって、規範的な文法観に従うならば、この種の名詞を主語にとる文（「舟こぞりて泣きにけり」、*“our whole town went to her funeral.”*）は、選択制限の違反に基づく修辭的に特殊な表現ということになる。

しかし、この種の表現は、日常言語に典型的にみられる“The kettle is boiling.”、「鍋が煮えている」といった慣用表現の発現を可能とするメトニミーの認知プロセスに基づいて自然に理解することができる。メトニミーの認知プロセスには、認知のドメインにおける焦点のシフトに関し、基本的に二つの方向が考えられる。その一つは、図 14 の (a) に示されるように、ある認知のドメインの全体が参照点 (R) となり、この参照点からその一部のドメインをターゲット (T) として認知していくプロセスである。もう一つの認知プロセスは、図 14 の (b) の図に示されるように、問題の認知のドメインの一部が参照点 (R) となり、この参照点から全体のドメインをターゲット (T) として認知していくプロセスである。

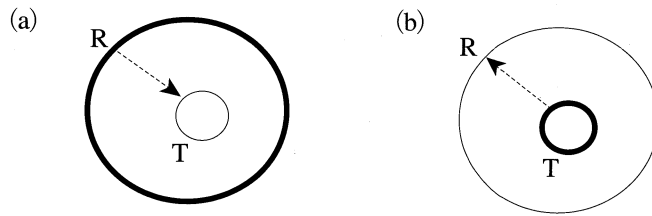


図 14

上記の (1)、(2) の例における [舟] と [our whole town] は、それぞれ [舟の人々]、[all the people in the town] の意味で修辭的に使われているが、この種の意味解釈は、図 14 の (a) の認知プロセスを介して可能になる。すなわち、(1)、(2) の例では、参照点 ([舟]) → ターゲット ([舟の人々])、参照点 ([our whole town]) → ターゲット ([all the people in the town]) の認知プロセスを介して可能になる。

次の例の “the first human face”、“(文鳥の) 足” も、広義のメトニミー表現の一種として修辭的に使われている。⁹

- (3) You're the first human face I've seen for ages.

(Iris Murdock, *Under the Net*: 173)

- (4) 文鳥は … 心持前へ伸したかと思ったら、白い羽根が又ちらり動いた。文鳥の足は向ふの止まり木の真中あたりに具合よく落ちた。(夏目漱石『文鳥』: 15)

(3) の [the first human face] は人物を意味し、また (4) の [足] は止まり木に舞い降りた [文鳥] を暗示している。この種の解釈は、図 14 の (b) の部分から全体への復元的な認知プロセス (すなわち、[参照点としての部分] → [ターゲットとしての全体] の認知プロセス) を介して可能となる。

以上の参照点とターゲットの関係に基づく認知プロセスは、空間的な隣接関係がかかわる〈(空間・場所としての) 容器と(その空間・場所の中の) 存在〉ないしは物質的な隣接関係がかかわる〈全体と部分〉のメトニミーリンクによって可能となっている。これに対し、(5) の例の場合には、この種のメトニミーに基づく認知プロセスとメタファーに基づく認知プロセスが複合的にかかわっている (cf. 山梨 1988: 185)。

- (5) a. 獅子鼻と才槌頭がケンカしている。
b. 太鼓腹がジョギングしている。

⁹ 旧来の伝統的な修辭学では、〈部分-全体〉の認知プロセスにかかわる “the first human face”、“(文鳥の) 足” のような言語表現は、提喩の一種とみなされているが、本稿では、この種の表現は、広義の換喩の一種とみなす。

(5) の「獅子鼻」、「才槌頭」、「太鼓腹」という表現の「鼻」、「頭」、「腹」は、身体の一部を意味し、この部位が参照点として機能しターゲットとして問題の人物が含意されるという点では、広義のメトニミー表現である。しかし、「獅子鼻」、「才槌頭」、「太鼓腹」という表現は、その主要部の「鼻」、「頭」、「腹」がそれぞれ「獅子」、「才槌」、「太鼓」という修飾部によって形容されているという点でメタファー表現でもある。この点で、(5) のタイプの表現は、メトニミーとメタファーに基づく認知プロセスが複合的にかかわっている表現である。(ここでは、この種の複合的な修辭表現を、「メトファー」(metaphor) 表現) と呼ぶことにする。)¹⁰

(5) のメトファー表現(「獅子鼻」、「才槌頭」、「太鼓腹」)の基本的な認知構造は、図 15 のように規定される。

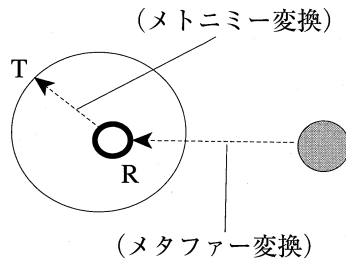


図 15

図 15 の左側の R でマークされる太線のサークルは問題のメトファー表現の身体部位、T でマークされる細線のサークルはこの身体部位が含意する人物、右側の網かけでマークされるサークルは、問題の身体部位を比喩的にたとえるソースドメインの存在を示す。また、この図の左側の斜め上に延びる矢印と右側の水平に延びる矢印は、それぞれ (5) のメトファー表現に複合的にかかわるメトニミー変換とメタファー変換の認知プロセスを示している。

ここまでの修辭的な表現では、時間軸にそったテキストのオンラインの意味解釈は問題になっていない。これに対し、(6) の例はどうか。

- (6) 高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を両岸に見つつ、東へ走って、加茂川を横ぎって下るのであった。
(森鷗外『高瀬舟』: 107)

この例では、文頭の「高瀬舟」の時間軸にそったオンラインの意味解釈が問題となる。(6) の場合、「高瀬舟は、... 家々を両岸に見つつ」までのテキスト文脈を問題にするならば、(物理的な存在としての高瀬舟に眼がついている訳ではないから) [高瀬舟] は「見つつ」

¹⁰ 「メトファー」(metaphor) という用語は、〈メトニミー (metonymy) + メタファー (metaphor)〉のブレンド表現として筆者が考案した造語である。メトファーにかかわる修辭的な表現に関しては、さらに山梨 (1988: 185) を参照。

という動詞との共起関係からみて) [その舟に乗っている人物] をメトニミー的に含意する。しかし、このテキストの後続文脈の「東へ走って、加茂川を横ぎって下るのであった」まできた段階では、(「横ぎって」、「下る」という動詞との共起関係からみて) 文頭の[高瀬舟] は、この[舟] と [舟に乗っている人物] のどちらかではなく、同時に (高瀬川を移動して行く物理的な存在として) この両者をゲシュタルト的に含意している。

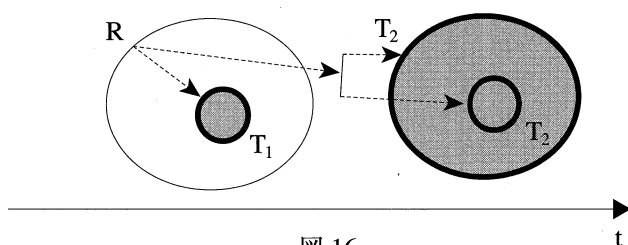


図 16

以上の「高瀬舟」の時間軸にそったオンラインの意味解釈の変容プロセスの一面は、図 16 に示される。図 16 の R の「高瀬舟」は、「高瀬舟は、... 家々を兩岸に見つつ」までのテキスト文脈においては、(「見つつ」という動詞との共起関係からみて) T_1 の [舟に乗っている人物] をメトニミー的に含意する。しかし、後続文脈の「東へ走って、加茂川を横ぎって下るのであった」の文脈では、(「横ぎって」、「下る」という動詞との共起関係からみて) T_2 でマークされる [舟] と [舟に乗っている人物] の両者をゲシュタルト的に含意している。

テキストの構成要素が指示する意味は、テキストの展開にかかわる時間的な要因から独立して、その意味が固定している保証はない。テキストの構成要素の意味は、テキストの時間的な展開とともに柔軟に変容していく。以上の事実、言語表現の指示内容が、文脈に応じてダイナミックに変化していくプロセスを規定するオンライン文法の観点からの分析の必要性を示している。

6. オンライン文法と認知のダイナミズム

具体的な状況において使用される伝達の手段としての言葉は、時間軸にそったテキストの展開のオンライン・プロセスにおいてダイナミックに変容していく。しかし、これまでの静的な言語的知識 (ないしは言語運用の側面を無視した自律的な言語的知識) を前提とする文法研究では、言葉の文法的側面や意味的側面の記述・説明に際し、時間軸にそった文ないしはテキストの展開のオンライン・プロセスにかかわる要因は捨象されている。しかし、具体的な伝達文脈における言葉の使用においては、時間軸にそった文ないしはテキストの展開のオンライン・プロセスを考慮しない限り、自然な予測が不可能な言語現象が広範に存在する。その一例は、前節の (6) のテキストにおける文頭の主語のオンライン・

プロセスにおける意味のダイナミックな変容にみられる。

テキストの展開のオンライン・プロセスを反映する事例としては、さらに先行詞と代名詞の照応関係にかかわる次のような例が挙げられる。先行詞と代名詞の照応関係が、常に単数か複数のいずれかに固定されているとはかぎらない。状況によっては、先行詞の単複の解釈と代名詞の単複の解釈が、時間軸にそった文（ないしはテキスト）の展開のプロセスにおいて変容する場合が考えられる。例えば、以下の例の先行詞と代名詞の単複の解釈に関しては、時間軸にそった言語使用の文脈において変容がみられる（山梨 2000a: 78）。

(1) John returned from the police_i yesterday. He said they_i treated him like a child.

(1) の先行文の the police は、警察(署)の意味であるが、後続文では、警察の関係者を意味する複数形の代名詞の they がこれに呼応している。このタイプの事例は、先行詞と代名詞の文字通りの同一指示性に基づく照応の分析では、一律に予測することは不可能である。(1) のタイプの事例には、図 17 に示されるような、〈統合的スキーマ〉と〈離散的スキーマ〉の認知作用のダイナミックな変化（すなわち、〈統合的スキーマ〉から〈離散的スキーマ〉へのシフト）がみられる。¹¹

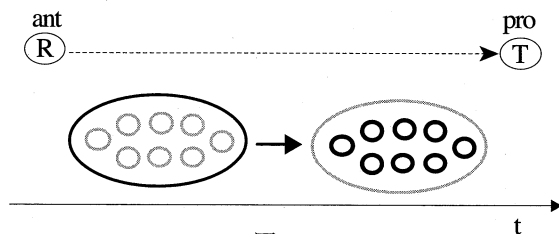


図 17

図 17 の場合、先行詞 (ant) の R は、〈統合的スキーマ〉を指示する先行文の the police に、また代名詞 (pro) の T は、〈離散的スキーマ〉を指示する後続文の they に対応する。

¹¹ ここで問題にする〈統合的スキーマ〉と〈離散的スキーマ〉は、以下のイメージスキーマに相当する（山梨 1995: 127、山梨 2000a: 77）。

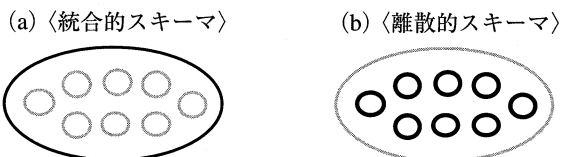


図 (i)

〈統合的スキーマ〉と〈離散的スキーマ〉の発現、両スキーマの図と地の反転の認知プロセスは、日常言語の単数／複数の概念にかかわる現象、照応現象、等の記述・説明に関し重要な役割を担う。この種の言語現象の具体的な分析に関しては、さらに山梨 (1995: 120-127)、山梨 (2000a: 76-78) を参照。

また、この図の〈統合的スキーマ〉から〈離散的スキーマ〉に延びる太線の矢印は、前者のスキーマから後者のスキーマへのプロファイル・シフトの認知プロセスを示している。上の(1)のタイプの照応現象の存在は、この〈統合的スキーマ〉から〈離散的スキーマ〉へのプロファイル・シフトにかかわる認知作用の柔軟性を考慮するならば、自然に理解することができる。

(1)のタイプの照応の場合には、先行詞と代名詞の照応関係の背景となるスキーマが、〈統合的スキーマ〉から〈離散的スキーマ〉の方向にシフトしている。これとは逆に、図18に示されるように、〈離散的スキーマ〉から〈統合的スキーマ〉の方向にシフトする方向はどうか。

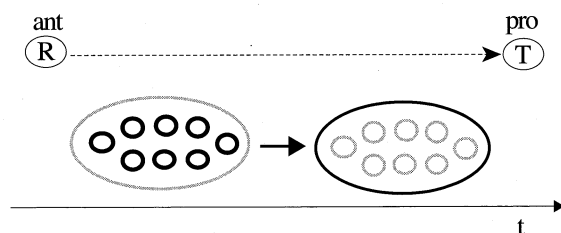


図 18

テキストの展開にそって、この方向で先行詞と代名詞の指示内容がオンライン的に変容していく例としては、(2)が考えられる(山梨 1992: 57-58)。

- (2) Fry the onions_i in the butter till they_i're tender. Add the carrots, parsely, salt, and pepper, and put it_i all into a buttered casserole dish. Pour the cream on top, cover, and bake at 350 for forty-five minutes.

(Peg Bracken, *The I Hate to Cook Book*: 43)

基本的に、照応関係にある先行詞と代名詞は、数の上で一致するのが普通である。例えば、先行詞が複数であれば、基本的に後続の代名詞は複数形、先行詞が単数であれば後続の代名詞は単数形になるはずである。しかし、(2)のタイプのテキストをみるかぎり、この種の一般化は成り立たない。

(2)は、料理の作り方の手順を説明しているマニュアルの一節である。このテキストでは、第1文の先行詞は複数形の the onions であるが、これと照応関係にある後続文の代名詞は、テキストの展開にそって、複数形の they から単数形の it にオンライン的に変容している。より具体的にみるならば、このテキストの第1文では、オニオンをバターで柔らかくなるまで炒めると述べており、この時点では、その意味内容からして複数形の代名詞の they が先行詞の the onions と照応的に呼応している。しかし、第2文の最初の等位節では、この炒められたオニオンに、さらにニンジン、パセリ、塩、ペッパーが加えられ、先行詞の指示内容が変化している。テキストのこの時点までの先行詞の指示内容のオ

ンライン的な変容のプロセスは、図 19 に示される。

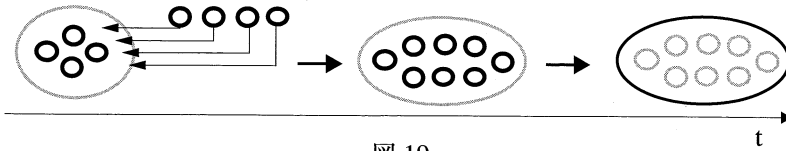


図 19

図 19 は、先行詞の指示内容が、(時間軸にそって) オニオンそれ自体から、オニオンにニンジン、パセリ、塩、ペッパーが加えられていくプロセスを示している。このプロセスを経た結果の状態が、この図の中央の〈離散的スキーマ〉に示されている。

この時点では、(2) の例における第 2 文の後半の等位節 (i.e. put it all into a buttered casserole dish) の代名詞の it は、図 19 の右端に示される〈統合的スキーマ〉に対応する先行詞の指示内容と直接的には照応しない点に注意する必要がある。この時点における〈離散的スキーマ〉に対応する先行詞は、意味的には複数の指示内容に対応し、単数の代名詞の it と照応的に呼応することは不可能である。したがって、ここで単数の代名詞の it が (2) のテキストに生起しているのは一見したところ不可解である。しかし、第 2 文の後半の等位節の直前の時点で、先行詞の指示内容が (上の図 19 の後半部分に示されるように) 〈離散的スキーマ〉から〈統合的スキーマ〉にシフトするならば、第 2 文の後半の等位節の段階で単数の代名詞の it が生起するのは自然に予測できる。実際、(2) のテキストを解釈するならば、第 2 文の後半の等位節の時点で、オニオンにニンジン、パセリ、塩、ペッパーが加えられた全体を、一まとまりの存在として、バターをしいた蓋つきのディッシュに入れるように料理の手順が指示している。したがって、この時点で、問題の先行詞が単数形の代名詞の it と照応的に呼応しているのは、自然に理解することができる。

一般に、これまでの言語学における照応分析では、先行詞と代名詞の照応関係は、両者の間に成立する先行関係、統率関係といった形式的な構造上の制約から予測可能であるという前提に立って研究がなされてきている。しかし、以上にみた (1)、(2) のタイプの照応の事例は、この種の形式的な構造上の制約だけからは、先行詞と代名詞の表層レベルの分布関係は予測できないことを示している。言語現象を包括的に記述し、説明していくためには、テキストが指示する事態の変化に応じて、問題の言語表現の指示内容がダイナミックに変化していくプロセスを規定するオンライン文法の観点からの言語のモデル化を図っていく必要がある。

7. 言語運用における誤用的側面

これまでの時間軸にそった発話のオンライン・プロセスの動的な側面を捨象した文法研究では、発話される言語表現は、その表現の発話の開始時点から (その表現を言い終え

る)最後の時点まで、問題の言語表現を構築する意図や計画が不変である、という前提に立っている。しかし、日常の自然発話の言語表現には、発話の途中の段階での言い直し、言い誤り、繰り返し、等の破格的な表現が広範に観察される。

一見したところ、言い直し、言い誤り、等の言語表現は、非合理的な言語運用にかかわる制約に起因するようにみえるが、この種の表現の中には、時間軸にそって発話を構築していく言語主体の主観的な認知プロセスが反映されている。以下では、この種の認知プロセスのうち、まず意味の反転の認知プロセスにかかわる言語現象を考察していく。この種の認知プロセスに起因する言語現象の典型例としては、次の例が挙げられる。(以下の例では、言語運用の点からみて問題となっている箇所は、イタリックで示している。)

- (1) a. It's at the *top*—I mean—*bottom* of the refrigerator.
 b. Oh, it's too damn *cold*—*hot*!
 c. I really *like* to—*hate* to talk with the gentleman.
 (2) それから出庫日ってゆうのは一、えー、あつ、ごめん、入庫日ってゆうのは一、...、印刷が終わった5月に入庫しますんで。

(〈男性のことばコーパス〉: No. 3054)

(1) の a は、*bottom* と言おうとするところを、意図した意味が反転して *top* と言ってしまい、これを後続の発話で *bottom* と言い直している発話である。同様の反転の認知プロセスに起因する言い直しは、(1) の b、c と (2) の例にもあてはまる。¹² 以上の類例としては、(3) が挙げられる。

- (3) The best way to defeat the totalitarian of hate is with an ideology of *hope*—an ideology of *hate*—excuse me—with an ideology of *hope*.¹³

(George W. Bush, Jan. 11, 2007)

(3) は、アメリカの前大統領のブッシュのスピーチの一例である。この場合には、発話の途中で *hope* を *hate* に言い直している。この例の *hope* と *hate* は、厳密な意味では対極的な反意語ではないが、基本的には、この種の語彙の間にもプラス (+) とマイナス (-) の意味の対立が存在し、この点で主観的な価値のレベルにおける反転の認知プロセスが認

¹² (1) の a のタイプの言い誤りは、空間における上下関係の反転の認知プロセスに起因する誤りである。これに対し、次の (i)、(ii) の例の言い誤りは、時・空間関係のシフトの認知プロセスに起因している。

(i) You can see two *contemporary*, er—sorry, *adjacent* buildings. (Fromkin 1971: 46)

(ii) I think the garden is *during* the house, er—*behind* the house.

¹³ <http://politicalhumor.about.com/library/blbushisms2007.htm>

められる。¹⁴

次のブッシュのスピーチの例はどうか。

- (4) a. The truth of that matter is, if you listen carefully, Saddam would still be in power if he were the president of the United States, and the world would be a lot *better off*.¹⁵ (George W. Bush, Oct. 8, 2004)
- b. I am surprised, frankly, at the amount of distrust that exists in this town. And I'm sorry it's the case, and I'll work hard to try to *elevate* it.¹⁶ (George W. Bush, Jan. 29, 2007)

(4) の a、b の例では、発話の時間軸にそった連辞的（ないしはシンタグマティック）な言い直しは認められないが、これらの例の文脈を考えた場合、イタリックで示されている a の *better off* と b の *elevate* は、明らかに聴衆に対してブッシュが伝えたい意味の反対を意味する表現が発話意図に反して使われている。(5) の場合にも、聴衆に伝えたい意味と矛盾する表現 (*it's in our national interest*) が使われている。この表現の意味は聴衆に伝えたい意味と矛盾するが、この表現自体に、ブッシュ自身が隠蔽しようとする意味が（本音として）ストレートに出ている。

- (5) I'm oftentimes asked, what difference does it make to America if people are dying of malaria in a place like Ghana? It means a lot. It means a lot morally, it means ...—*it's in our national interest*.¹⁷ (George W. Bush, Feb. 20, 2008)

言語運用の観点からみた場合、以上の事例は、発話の時間軸にそって連辞的に言い直しがなされている事例となされていない事例に分けられるが、この種の事例の生成には、基本的に次の二つの認知プロセスがかかわっている。

- (A) 連辞的（シンタグマティック）な反転の認知プロセス
- (B) 範列的（パラディグマティック）な反転の認知プロセス

¹⁴ 以上の例には、意味レベルにおける主観的な反転の認知プロセスがかかわっている。これに対し、次の言い誤りの例には、空間の近接関係にかかわる認知プロセスのシフトが関係している。

- (i) Could you please wipe the *lamp*, uh, *table*?
- (ii) Hey, the *knife*, no, *fork* in the box is rusty.
- (iii) We have to buy some *bread*, I mean, *butter*.

(<http://courses.nus.edu.sg/course/elljwp/aphasia.htm>)

¹⁵ <http://politicalhumor.about.com/library/blbushisms2004.htm>

¹⁶ <http://politicalhumor.about.com/library/blbushisms2007.htm>

¹⁷ <http://politicalhumor.about.com/library/blbushisms2008.htm>

(A) の認知プロセスは、発話の時間軸にそった言い直しが認められる (1)-(3) の事例に関係している。これに対し、(B) の認知プロセスは、この種の言い直しが認められない (4)、(5) のような事例に関係している。

以上の例だけでなく、日常言語の表現の中には、(規範的な文法では容認されないが) 言語主体の主観的な認知プロセスとの関連で自然に理解される表現が広範に存在する。次のブッシュの発話における *misunderestimate* という動詞は規範的には誤用であるが、この種の表現は、*misunderstand* と *underestimate* のブレンディングの認知プロセスに起因する表現として自然に理解できる。

- (6) I think they *misunderestimated* the will and determination of the Commander-in-Chief, too.¹⁸
(George W. Bush, Sept. 26, 2001)

基本的に、日常言語の生成プロセスは、話し手の概念体系に存在する範列的 (パラディグマティック) な語彙のネットワークの中から、語彙を選択して連辞的 (シンタグマティック) な統語連鎖のスロットにその語彙を投入して、記号列を形成していくプロセスである。(6) の例は、この記号列の生成のプロセスに際し、範列軸における *misunderstand* と *underestimate* がブレンド的に統合され、この記号列が統語連鎖の動詞のスロットに投入された例として理解できる。¹⁹

(6) は、複数の語彙のブレンディングの例であるが、複数の構文のブレンディングの例も考えられる。3.3 節でみた以下の構文の誤用的拡張がその典型例として挙げられる (山梨 2000: 207-208)。²⁰

¹⁸ <http://politicalhumor.about.com/library/blbushisms2001.htm>

¹⁹ 次の James Joyce の小説 (*Ulysses*) からの例の述部の表現も、一見したところ、(6) の例に似ている。

Davy Byrne *smiledyawnednodded* all in one:—Iiiiiichaaaaaaach!

(James Joyce, *Ulysses*: 145)

²⁰ 文レベルだけでなく、句レベルにおいても、複数のイディオムの表現が影響し合い、ブレンド的な表現が創発する場合も考えられる。次のイディオムを考えてみよう。

(i) a. 手をさしのべる
b. 全身全霊をささげる

これらの表現は、基本的には、それぞれがしかるべき文脈で独自に使われるイディオムである。しかし、実際の言語使用の文脈では、これらの表現が使われていくうちに両者が相互に影響しあって、次のようなブレンド的な表現が使われる可能性も考えられる。

(ii) a. (*) 全身全霊をさしのべる
b. (*) 手をささげる

このタイプの表現は、現時点では容認されていない表現であり一般的には誤用とみなされる。しかし、この種のブレンド的な表現の発現のプロセスのなかに、日常言語の動的な変化と創造性の一面をうかがうことができる。

- (7) a. Why did you do that for?
b. [Why did you do that? + What did you do that for?]
- (8) a. The child seems sleeping.
b. [The child seems to be asleep. + The child is sleeping.]
- (9) a. Be damned to you!
b. [Be damned! + Woe to you!]

ここまでの例は、基本的には語彙レベルないしは文法レベルにおけるブレンディング現象であるが、意味的なブレンディングに起因する言語現象も興味深い。その典型例は、(10) のような混合比喩 (mixed metaphors) にみられる。(文頭の (#) は、問題の文の比喩的な意味解釈が整合的でないことを示すものとする。)

- (10) a. (#) We can now follow the path of the core of the argument.
b. (#) The content of the argument proceeds as follows.
c. (#) The direction of his argument has no content.
d. (#) I am disturbed by the vacuous path of your argument.

(10) の例は、〈議論 (argument)〉に関する比喩表現であるが、語彙レベルと文法レベルの観点からみた場合には適切な文であり、英語の表現として何の問題もない比喩表現にみえる。しかし、(10) の例には、次の二つの概念メタファーが混在している。

- (11) a. The Argument-as-Journey
b. The Argument-as-Container

〈比喩の混合写像〉

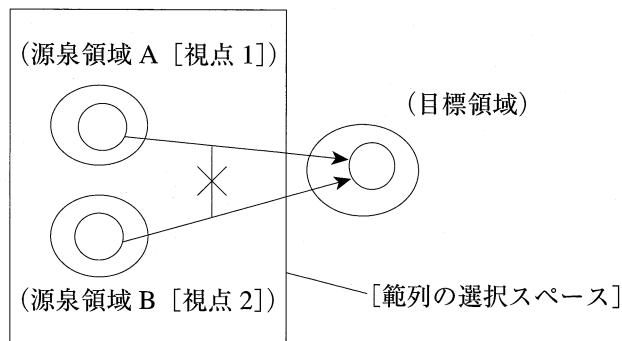


図 20

(10) の例の path、proceed、direction、path のような表現は、(11) の a の〈議論は旅である〉という比喩が関係していることを示している。また、core、content、vacuous のような表現は、(11) の b の〈議論は容器である〉という比喩が関係していることを示してい

る。この点で、(10)の例は混合比喩の一種とみなされる。

比喩生成の認知プロセスからみた場合、(10)の例では、言語主体が〈議論〉という概念を比喩的に叙述する際に、〈旅の視点〉と〈容器の視点〉を混在させている。したがって、(10)の表現には、解釈に際し視点の一貫性が欠如していることになり、この点で比喩表現としての適切性を欠くことになる(図20)。

以上は、範列レベルにおける競合する複数の語彙、構文、比喩などのブレンドの認知プロセスに起因する言語現象である。これに対し、(12)–(15)は、連辞レベルにおける記号列の反転の認知プロセスに起因する言い誤りの事例である。

- (12) Families are where our nation finds hope, where *wings take dream*.²¹

(George W. Bush, Oct. 18, 2000)

- (13) a. Why don't you apply *the wound* to *water*?

[⇐ Why don't you apply *water* to the *wound*?]

- b. They sliced *the knife* with a *salami*.

[⇐ They sliced the *salami* with a *knife*.]

- c. The organization takes *plant* in the *place*.

[⇐ The organization takes *place* in the *plant*.]

- (14) 今日からといわず、明日から練習にはげんで下さい。

[⇐明日からといわず、今日から練習にはげんで下さい。]

- (15) 寅：「うっせーな。なんでえ、たまに帰ってくりゃどいつもこいつも膨れっ面
ぱっかりしやがって。…」

おいちゃん：「ハアア～ いやだやだ。俺はもう横になるよ。オイ まくら、さくらとってくれ！ いや、違うな。さくら、枕とってくれ。…」

(『男はつらいよ 寅次郎恋歌』第8作(1971))

これらの事例では、イタリックでマークされている語彙の語順が、通常の統語的な語順と逆転している。基本的に同種の現象は、次の例にもみられる。²²

- (16) a. A lack of *pies* [⇐ A pack of *lies*]

²¹ <http://politicalhumor.about.com/library/blbushisms2001.htm>

²² (15)の言い直しは、問題の二つの語彙の音韻的な類似性にも起因している。この種の語順の逆転の例ではないが、語彙の類似性による言い直しの典型例としては、次の例が挙げられる。

PAMELLA: Being here is ... so *illusive* sometimes. ... I mean ... *illusionary*.

DARRYL: Those are two different words ..., and they mean two different things.

PAMELLA: Well it's *illusionary*. ... I take back what I said about *illusive*.

(<UCSB コーパス>: 59708-60940)

- b. *Tease my ears* [← *Ease my tears*]
 c. *It's roaring with pain* [← *It's pouring with rain*]
 (17) a. こちら、チコンにきみカレーになります。[←こちら、チキン煮込みカレーになります。]
 b. ほがったとうちょう。ちょろけたトコレート。[←尖った包丁、とろけたチョコレート。]²³
 c. 空気がどよんでる！[←空気がよどんでる！]²⁴

ただし、(16)、(17) の場合には、逆転の対象が語彙レベルではなく個々の音素ないしは音節である点に特徴がある。この場合には、異なる二つの単語の頭音の子音（ないしは母音）あるいは音節が入れ換わっている。²⁵ これに似た現象として、「ブンブクチャマが」（←「ブンブクチャがま（茶釜）」、「さざんか」（←「さんざか」（山茶花））などのいわゆる音位転移（metathesis）の現象が考えられるが、この場合には、逆転の対象が、異なる二つの単語の頭音（ないしは音節）ではなく、一つの語彙の隣接する音素ないしは音節である点に特徴がある。^{26, 27}

²³ <http://www.ne.jp/asahi/music/marinkyo/parolo/sonalterno.html.ja>

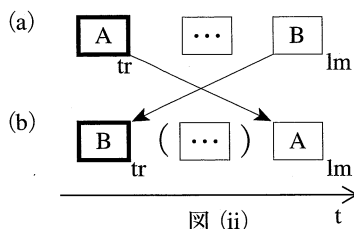
²⁴ <http://yatu.exblog.jp/7263040/>

²⁵ この種の現象は、一般に「語音転換」（spoonerism）と呼ばれる現象である。類例としては、次のような例が挙げられる。

- (i) *Mardon me, padam.* [← *Pardon me, madam*]
 (ii) *Can I sew you to another sheet?* [← *Can I show you to another seat?*]
 (iii) a. *Herlock Sholmes* [← *Sherlock Holmes*]
 b. *blushing crow* [← *crushing blow*]
 c. *sad balad* [← *bad salad*]
 d. *plaster man* [← *master plan*]

²⁶ 音位転移による言語変化の例としては、[brethern > brethren]、[childern > children]、[hunderd > hundred]、またこの種の音位転移による典型的な言い誤りの例としては、[ask > *aks]、[whisper > *whipsr] などが考えられる。

²⁷ 以上にみた言語現象は、連辞レベルにおける非連続的ないしは連続的な記号連鎖の反転現象の一種とみなすことができる。この種の現象には、図(ii)に示される図／地の反転がかかわっている。



図(ii)のA、Bをマークするtrは、問題の対象が一次的焦点（primary focus）としてのトラジェクター（trajector）、lmは、問題の対象が二次的焦点（secondary focus）としてのランドマーク（landmark）の認知的な役割を担っていることを意味する。（図(ii)のA、Bのボックスの太線と細線は、

連辞レベルにおける記号列の転移のプロセスを反映する言語現象としては、さらに転移修飾語 (transferred epithet) がかわる言語表現が興味深い。一般に、通常の連体修飾の表現では、その修飾部分は統語的に主要部を修飾する。しかし、転移修飾の表現では、統語的に主要部にかかるはずの修飾表現がその前後の表現を修飾し、(規範文法では容認されない) 修飾-被修飾関係が成立している。典型例としては、(18)、(19) の例が考えられる (cf. 山梨 1995: 179-180)。

- (18) a. 男は、つかれた夜道をとほとほ帰っていった。
 b. 女はじっとかなしい空を見上げた。
 c. 父には今夜はどうれしい酒はなかった。
 d. ああ、なつかしい山の湯よ。私は悲しい旅の空、昨日は東今日は西 …。

(川端康成『温泉宿』: 86)

- (19) a. He had taken a *dreary* road, darkened by all the gloomiest trees of the forest
 (Nathaniel Hawthorne, *Young Goodman Brown*: 7)
 b. I had been passing alone, on horseback, through a singularly *dreary* tract of
 country; and at length found myself, ... within view of the melancholy House
 of Usher. (Edgar Allan Poe, *The Fall of the House of Usher*: 138)
 c. The plowman homeward plods his *weary* way. And leaves the world to dark-
 ness and to me.

(Thomas Gray, *Elegy Written in a Country Church-yard*: 145)

(18)、(19) のイタリックでマークした形容詞 (「つかれた」、「かなしい」、「うれしい」、「なつかしい」、「悲しい」、「dreary」、「weary」) は、統語的には、それぞれその直後の名詞 (「夜道」、「空」、「酒」、「山」、「旅」、「road」、「tract」、「way」) にかかっているが、これらの形容詞は、意味的には問題の文の主語ないしは主体 (「男」、「女」、「父」、「私」、「he」、「I」、「the plowman」) にかかっている。この種の連体修飾の表現は、転移修飾の表現の一種とみなされる。この種の転移修飾の表現の背後には、ある存在の叙述に関する焦点シフトの認知プロセスが働いている。この認知プロセスは、基本的に図 21 に示される。

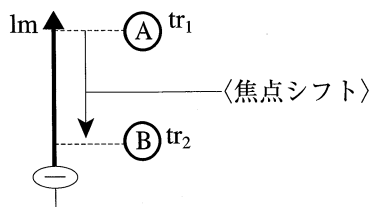


図 21

図 21 のランドマーク (lm=landmark) の太線の矢印は、叙述に関する判断基準 (「つかれた」、「かなしい」、「dreary」、等)、A のサークルのトラジェクター (tr_1 =trajector₁) は叙述の対象としての主体 (「男」、「he」、等)、B のサークルのトラジェクター (tr_2 =trajector₂) は叙述の転移対象としての存在 (「夜道」、「road」、等) を示す。また、トラジェクターとランドマークの叙述関係を示す破線 (---) を上から下に向かって結ぶ矢印は、叙述の焦点シフトを示している。

以上の転移修飾の例にみられる主体から別の対象への叙述のシフトは、一見したところ恣意的に見えるが、修飾における叙述がシフトする対象は、主体の物理的行為や知覚行為に密接にかかわる場所や主観的な知覚対象である。換言するならば、転移修飾において叙述のシフトにかかわる主体と対象は、問題の物理的行為や知覚行為において主観的に一体化している。このような主観的な一体化がなされている事態フレーム内において、それを構成する主体と対象の間に焦点シフトの認知プロセスが起動している点に注意する必要がある。

この種の焦点シフトは、問題の文が指示する事態フレームの構成要素としての複数のトラジェクターの間のずれの認知プロセスであり、この種のずれは基本的に共通の事態フレームに関係している。以上の言語事例とは質的に異なる言語現象であるが、次のような言い直しにかかわる言語現象 (e.g. You can see *two contemporary*, er—*sorry*, *adjacent* buildings. I think the garden is *during* the house, er—*behind* the house.) では、時間のドメイン (i.e. *contemporary*, *during*) と空間のドメイン (i.e. *adjacent*, *behind*) の間に認知のずれが生じている。また、次の言い直しにかかわる事例 (e.g. Could you please wipe the *lamp*, uh, *table*? Hey, the *knife*, no, *fork* in the box is rusty. We have to buy some *bread*, I mean, *butter*.) では、日常の生活空間を構成する要素の間に認知のずれが生じている。例えば、ランプとテーブルは、一つのセットとして日常生活の空間の一部を構成している。同様に、ナイフとフォーク、パンとバターは、洋食における基本的な食事のセットを構成している。このような生活文脈におけるセットを構成する要素の間に隣接関係の認知のずれが生じ、その一方に言及しようとして他方を言及する行為は、必ずしも不自然な現象と

は言えない。²⁸ 以上の言い直しの事例は、この種の隣接関係の認知のずれに起因する現象の一種とみなすことができる。

8. 理論的考察——オンライン文法と認知語用論

統語論の自律性を前提とする形式文法のアプローチは、文法能力は、人間の一般的な認知能力や運用能力からは独立した能力であるという言語観を前提にしている。また、論理学やレトリックの分野においては、一般的に論理能力は文法能力とは区別される理性的思考、レトリックの能力は文法能力とは独立した言葉の綾ないしは思考の綾にかかわる能力として位置づけられる。これに対し、本稿では、認知語用論の視点（認知能力を反映する主体の経験的な基盤を背景とする語用論の視点）から、日常言語の文法、論理、レトリックに反映される言語現象を考察した。

これまでの言語学の研究（特に形式文法の研究）では、文法は形式的で自律的な記号系であり、文法現象は、記号の形式的な関係からなる統語制約によって規定されるという前提に立っている。しかし、日常言語には、この種の統語論の形式的な自律性を前提とするアプローチからは予測できない文法現象が広範に存在する。本稿では、外部世界を解釈し意味づけしていく言語主体の認知能力にかかわる制約を考慮しないかぎり、自然な予測・説明が不可能な言語現象を指摘し、認知語用論の視点から、この種の現象を一般的な認知能力の制約（e.g. 参照点能力、ブレンディング、等の制約）に基づいて規定した（3節）。4節では、日常言語の推論現象を分析し、人間の思考の中心をなすと考えられている論理能力の一面（推論プロセス）を、焦点化、メタファー写像、等の認知能力の観点から再規定した。5節では、日常言語の文法を越える言葉の綾（ないしは思考の綾）の能力とされている修辞能力の一面に関し、参照点能力をはじめとする認知能力の制約に基づく再分析を試みた。

以上の認知語用論の視点に基づく文法、論理、レトリックにかかわる言語現象の考察に対し、6節と7節では、オンライン文法（On-line Grammar）を背景とする認知語用論の視点から言葉の運用的な側面にかかわる現象を考察した。これまでの自律的な言語的知識を前提とする文法研究では、言葉の文法的な側面や意味的な側面の記述・説明に際し、時間軸にそった文ないしはテキストの展開のオンラインの認知プロセスにかかわる要因は無視されている。6節では、認知語用論のパロール的視点から、時間軸にそった文ないしは

²⁸ この種の隣接性の認知のずれにかかわる言語行動は、失語症における言語行動の問題とも関係している（cf. Goldstein 1948: 270, Jackson 1915: 116, Jakobson 1963: 56, 1971: 62）。

テキストの展開のオンライン・プロセスを考慮しないかぎり、自然な予測が不可能な言語現象の認知的な規定を試みた。7節では、さらに認知語用論のパロール的視点から、日常言語の自然発話にみられる言い直し、言い誤り、繰り返し、等の破格的な言語現象を考察した。言い直し、言い誤り、等の言語表現の発現は、一見したところ、非合理的な言葉のパフォーマンスにかかわる制約に起因するように見える。しかし、この種の表現の中には、時間軸にそって発話を構築していく言語主体の主観的な認知プロセスが反映されている。7節では、時間軸にそった発話の構築過程に焦点を当てながら、意味の反転、焦点シフト、ブレンディング、等の認知プロセスに起因する言い直しや言い誤りの言語現象の一面を考察した。

これまでの言語能力の自律性を前提とする文法研究（特に、言語能力と言語運用の二分法的な区分を前提とする生成文法の研究）では、本稿の6節と7節で考察した現象は、言語運用にかかわる現象であり、いわゆる言語能力にかかわる文法プロパーの現象としては認められない（Chomsky 1965: 3）。しかし、本稿の考察では、生成文法が前提とする言語能力と言語運用のカテゴリカルな二分法的な区分は認めない。いわゆる文法的な知識は、厳密には、日常言語の伝達の文脈において常にゆらいでおり、ある時点において非慣用的で特殊な用法とみなされる現象も、慣用化のプロセスを介して文法的な知識の一部として組み込まれていく可能性を秘めている。本稿の認知語用論に基づく文法観は、実際の言語使用の文脈を考慮したオンライン文法の視点から言語現象をダイナミックに分析していく立場に立脚している。²⁹

以上の認知語用論の観点からの考察は、言語能力としての文法知識（ないしは言語処理のオンラインの認知プロセスを無視した自律的な文法知識）を前提とする言語学の研究を、オンラインの言語処理の認知的要因（ないしは言語運用的な要因）から根本的に問い直していくための重要な検証の場を提供する。

9. むすび

これまでの言語学の研究では、自律的で静的な言語的知識を前提とする文法の研究が中心になり、言語運用にかかわる言語現象の問題を考慮に入れたダイナミックな語用論的な視点（とくに認知能力を反映する主体の経験的な基盤を背景とする認知語用論の視点）からみた言語現象の問い直しは、本格的にはなされていない。従来の言語研究では、文法ショーヴィニズムのアプローチが方法論的に先行し、語用論的な研究は狭い意味での文法

²⁹ 本稿の「オンライン文法」(On-line Grammar) のアプローチは、山梨 (2009) で提案している。「オンライン文法」の言語観に関しては、同書の7章を参照。

プロパーの研究を補完する研究とみなされる傾向にあったと言える。この傾向は、伝統的に、言語学の研究のターゲットを音韻論、形態論、文法論、意味論のようなモジュール的な下位部門として分類し、語用論の部門をこれらの下位部門からカテゴリーカルに区分することに起因する。これに対し、本稿の認知語用論のアプローチは、この種の言語研究のモジュール的な下位区分は認めない。本稿では、むしろより包括的で動的な認知語用論の視点から、これまでの音韻論、形態論、文法論、意味論にかかわる現象を見直していく立場をとる。換言するならば、認知語用論のアプローチでは、談話・テキストレベルのマクロ的な現象だけでなく、これまでミクロ的な言語現象とみなされていた音韻・形態レベル、句レベル、文レベルなどにかかわる現象も、伝達の具体的な文脈において言語を使用する（あるいは理解する）認知主体の語用論的な制約を反映する言語現象として見直していく立場をとる。また、ここで問題とする語用論的な制約を反映する言語現象は、自律的な文法の規範を前提とする理想化された話し手・聞き手の言語知識としての言語現象ではなく、時間軸にそった情報処理のオンラインにかかわる言語生成と言語理解の具体的な認知プロセスを反映する言語現象として位置づける必要がある。この意味での言語現象の中には、広い意味で、誤用、言い直し、等の言語運用の制約を反映する臨床的な言語現象も含まれる。言語学の研究を、より包括的でダイナミックな研究として推進していくためには、臨床的な言語現象の分析も含めた以上の認知語用論の新たな視点からの考察が必要となる。

引用例出典

- 川端康成：『伊豆の踊子、温泉宿 他』新潮文庫（改版）、1985。
 森 鴎外：『高瀬舟』岩波文庫、1938。
 夏目漱石：『文鳥』角川文庫、1967。
 新潮日本古典集成：『伊勢物語』、新潮社、1976。
 『男はつらいよ 寅次郎恋歌』（第8作、1971）[松竹：2005、ASIN: B0009G3F70]
 Peg Bracken: *The I Hate to Cook Book*. New York: Fawcett, 1960.
 Theodore Dreiser: 'The Lost Phoebe.' (171-186), in Milton Crane (ed.) *50 Great American Short Stories*. New York: Bantam Books, 1965.
 William Faulkner: 'A Rose for Emily.' (217-226) in D. Angus (ed.) *The Best Short Stories of the Modern Age*. Greenwich, Conn.: Fawcett, 1962.
 Thomas Gray: 'Elegy Written in a Country Church-yard.' (145-148) in Francis T. Palgrave (ed.) *The Golden Treasury of the Best Songs and Lyrical Poems in the English Language*. Oxford: Oxford University Press, 1965.
 James Joyce: *Ulysses*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1922.
 Nathaniel Hawthorne: 'Young Goodman Brown.' (6-18) in Milton Crane (ed.) *50 Great American Short Stories*. New York: Bantam Books, 1965.

Edgar Allan Poe: 'The Fall of the House of Usher.' (138-157) in *The Fall of the House of Usher and Other Writings*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1986.

Iris Murdock: *Under the Net*. New York: Avon Books, 1967.

会話コーパス

女性のことばコーパス [= 現代日本語研究会 (編) 1999. 『女性のことば・職場編』 東京: ひつじ書房]

男性のことばコーパス [= 現代日本語研究会 (編) 2002. 『男性のことば・職場編』 東京: ひつじ書房]

UCSB コーパス [= Du Bois, John W. et al. 2000. *Santa Barbara Corpus of Spoken American English*, Part 1. Philadelphia: Linguistic Data Consortium]

参考文献

Austin, John L. 1962. *How to Do Things with Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.

Curme, George O. 1931a. *Syntax*. Boston: D.C. Heath & Co.

Curme, George O. 1931b. *A Grammar of the English Language*. Vol. 2. Boston: D.C. Heath & Co.

Fromkin, Victoria. A. 1971. "The Non-autonomous Nature of Anomalous Utterances." *Language* 47: 1, 27-52.

Grice, H. Paul. 1975. "Logic and Conversation." In Peter Cole and Jerry Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 41-58. New York: Academic Press.

Goldstein, Kurt. 1948. *Language and Language Disturbances*. New York: Grune & Stratton.

林 宅男. 2002. 「言語使用の認知的研究」高原脩・林宅男・林礼子(編)『プラグマティックスの展開』、77-122. 東京: 勁草書房.

林 宅男. 2006. 「認知語用論の展開——参照点能力と推論」、上田 功・野田尚史(編)『言外と言内の交流分野』、471-486. 東京: 大学書林.

Hockett, Charles F. 1958. *A Course in Modern Linguistics*. New York: Macmillan.

Jackson, Hughlings. 1915. "On Affections of Speech from Disease of the Brain." *Brain* 38 (Parts I & II), 107-129.

Jakobson, Roman. 1963. *Essais de linguistique générale*. Paris: Éditions de Minuit.

Jakobson, Roman. 1971. *Studies of Child Language and Aphasia*. The Hague: Mouton.

Jespersen, Otto. 1933. *Essentials of English Grammar*. London: George Allen & Unwin.

Johnson, Mark. 1987. *The Body in the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.

小泉 保(編). 2001. 『入門 語用論研究——理論と応用』、179-194. 東京: 研究社.

Lakoff, George. 1982. "Experiential Factors in Linguistics." In T. W. Simon and R. J. Scholes (eds.) *Language, Mind, and Brain*. 145-156. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press.

- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-Point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4: 1, 1-38.
- Langacker, Ronald W. 2000. *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Lerner, Gene H. (ed.) 2004. *Conversation Analysis—Studies from the First Generation*. Amsterdam: John Benjamins.
- Levelt, Willem J. M. 1989. *Speaking: From Intention to Articulation*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Morris, Charles W. 1938. *Foundations of the Theory of Signs*. Chicago: University of Chicago Press.
- 岡本雅史. 2006. 「比喩表現における意味論的主観性と語用論の主観性」、『日本語用論学会発表論文集』2, 9-16.
- Pike, Kenneth L. 1967. *Language in Relation to a Unified Theory of the Structure of Human Behavior*. The Hague: Mouton.
- Rubin, Edgar. 1958. "Figure and Ground." In D. C. Beardslee and M. Wertheimer (eds.) *Readings in Perception*, 194-203. Princeton, NJ: D. van Nostrand.
- Saussure, Ferdinand de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Paris: Payo.
- Yamanashi, Masa-aki. 1975. "Where Do Conditional Expressions Qualify?: Functional Variability between Logical and Ordinary Language Conditionals." In Roger W. Fasold and Roger W. Shuy (eds.) *Analyzing Variation in Language*, 228-240. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- 山梨正明. 1986. 『発話行為』東京：大修館書店.
- 山梨正明. 1988. 『比喩と理解』東京：東京大学出版会.
- Yamanashi, Masa-aki. 1989. "Pragmatic Functions of Sentence and Text Coordination in Natural Language." *Text* 9: 3, 291-315.
- 山梨正明. 1991. 「言語能力と言語運用を問いなおす」『言語』20: 10, 70-77.
- 山梨正明. 1992. 『推論と照応』東京：くろしお出版.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』東京：ひつじ書房.
- 山梨正明. 1997. 「自然言語における身体性」、『物性研究』（京都大学・基礎物理学研究所）、68: 5, 583-591.
- Yamanashi, Masa-aki. 1998. "Some Issues in the Treatment of Irony and Related Tropes." In Robyn Carston and Seiji Uchida (eds.) *Relevance Theory: Applications and Implications*, 271-281. Amsterdam: John Benjamins.
- Yamanashi, Masa-aki. 2000. "Negative Inference, Space Construal, and Grammaticalization." In Laurence R. Horn et al. (eds.) *Studies on Negation and Polarity*, 243-254. Oxford: Oxford University Press.
- 山梨正明. 2000a. 『認知言語学原理』東京：くろしお出版.
- 山梨正明. 2000b. 「語用論のダイナミズム」『語用論研究』2, 1-6.

- 山梨正明. 2001. 「認知語用論」、小泉 保(編)『入門 語用論研究——理論と応用』、179-194. 東京：研究社.
- 山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』東京：開拓社.
- 山梨正明. 2009. 『認知構文論——文法のゲシュタルト性』東京：大修館書店.